海異問

ル 2
1368
3

門 呂
帙 1368
巻 3

環海異聞巻之二

ナーツカ沖留記事之二

ヱストラズ　イワノイチ　ガラロフ」と

一船主の名ハ苗字なし彼国の人無て苗字を後トふつけよ事ふ時ハ苗字を稱しまい船も即ち人の船なり。始め蔵なし場所へ来ハガラロフより来しハ

一此魚ハ玉の如ク入リ難キ鴻ニシテ云ヒ
海獸乃皮類ニ立テのあふ船を造シ役
人も造居ルヨシ又伝ハル
一鴻人の首長ハ可手者ハ其元伝ヘ
居ル土宝ヘ入リて見ルハ常の者居ル要
よりハ玉て厚く板ニシて天井板ニ
ハ居ル板ハ玉の帝王より賜ヒしとて
御所物の英物ハ 今報の玉ハ
物と秘蔵シ外ハ見ス彼ハ出セシ見ル
給ふの玉ハ男人ハ煙草ハ反無ハ此
首長ハ非ハ反無ハ其ハ煙ハ
ハ出セ玉ハ此魚人ハ示シ所ハ
オロシイアハ玉より手頃ニ納ル役
なる人と交代ハ出セて指置ク所也
一病中燈油ハコージキ上ハ人ハ ヒルハ 海豹
ボフロウ 猟虎等の油を用ル仕の用ハ

麻繻半板の古糸を引き紀用作り

一疾い四ツ時既に寝せり新しき藁

稲ふ出り

一は鴉寒風至て烈き遠平にて吹倒さ

るるの度に四度程拙者居ずり食事ふ

通ひ場ふと僅の百ふ[illegible]拙者

節に付集雑[illegible]なりとて多き拙者に[illegible]

ぬるのも時に[illegible]

一食物に鱈。鮭。鰯。等の魚類半り見る絶り

一一ト七百ふ[illegible]度て[illegible]コージキの油[illegible]大

麦の粉を情り蒸りつけあとにて塩を[illegible]

水を加へ煮てゆるく煮るあを振棄れり

盃人に皮を紙麦[illegible]

襄英の板ふ[illegible]れを喫一ト

一鴉ふ半[illegible]の[illegible]を情きて[illegible]煙

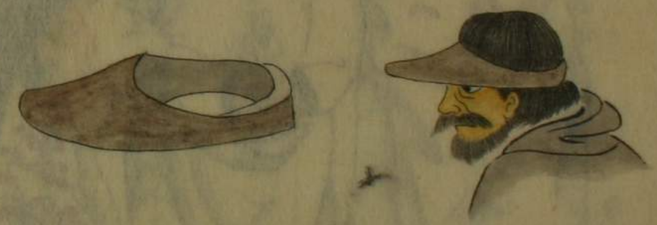
草ふ拵へ置き盃人稲より[illegible]

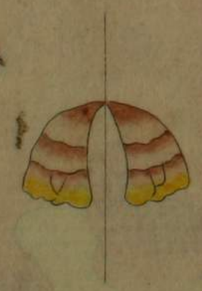
手掌（テノヒラ）へ一掴（ツマミ）取て焼あれば是を以て甚美
もつとも其ふ是を鼻へ夾（はさ）みて又齦（ハグキ）の辺へ含
ませ煙草の気をたゝ含て居る也
一は山水〻清冷なり
一婦人産室の病苦のときすでに産神七の品
を献の前に置て連れ行き洗ふ又時に抱子（ダキコ）を生ずる
抱き行きて水をあびせる乳汁〻出る義多くす
と乳母茶子共に肉粉を与へ養育せ居る也

島人男女並
少女之図
此島人の
名を
アリラート
といふ

額上頭圍ふためる
冠り物の図

木を彫て作る
漁猟ふ出るとき
用ゆ新古ふ似たり





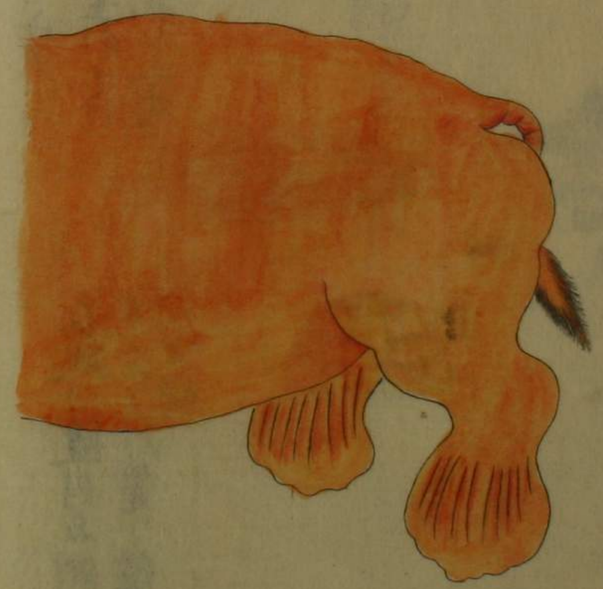
蝦の婦人鼻柱ふ穴を穿ち
小木を挿ふさし連環を垂れ下げ
たる全図並ふ耳輪数孔を穿ち
図形ふ似たる全図

紡錘之図

セイウチの牙ふて作る
俗年持手ふ寫生

衣服の縫目去側ふ
オクチヨウ縫ふ縫
たる図

セイウチ図

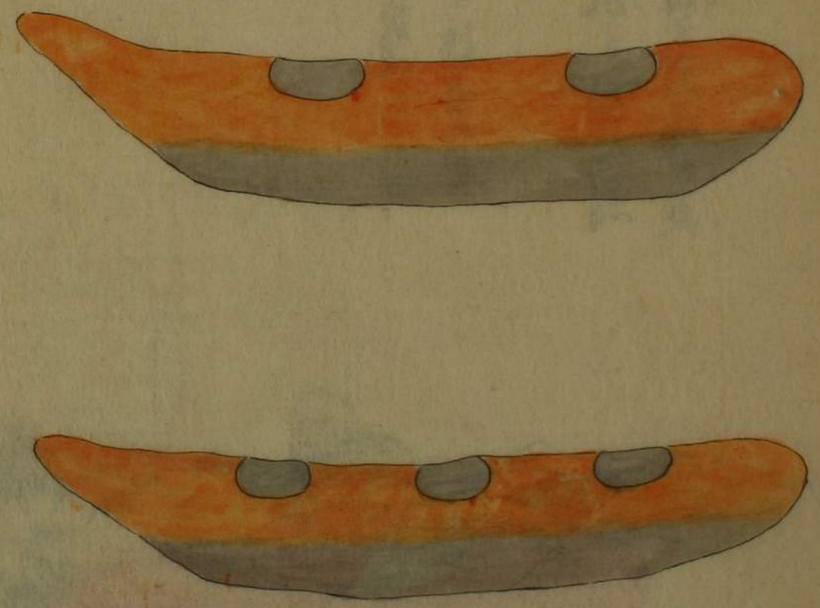


島人頭まて禿(カブ)る皮衣を着
皮船ふ乘り猟(モリ)を使ひ漁
猟をなす図

船はなの例ふ板なの
猟(モリ)を結ひ付なり

皮船全図

弐人乗
三人乗
の船なり



猟全圖

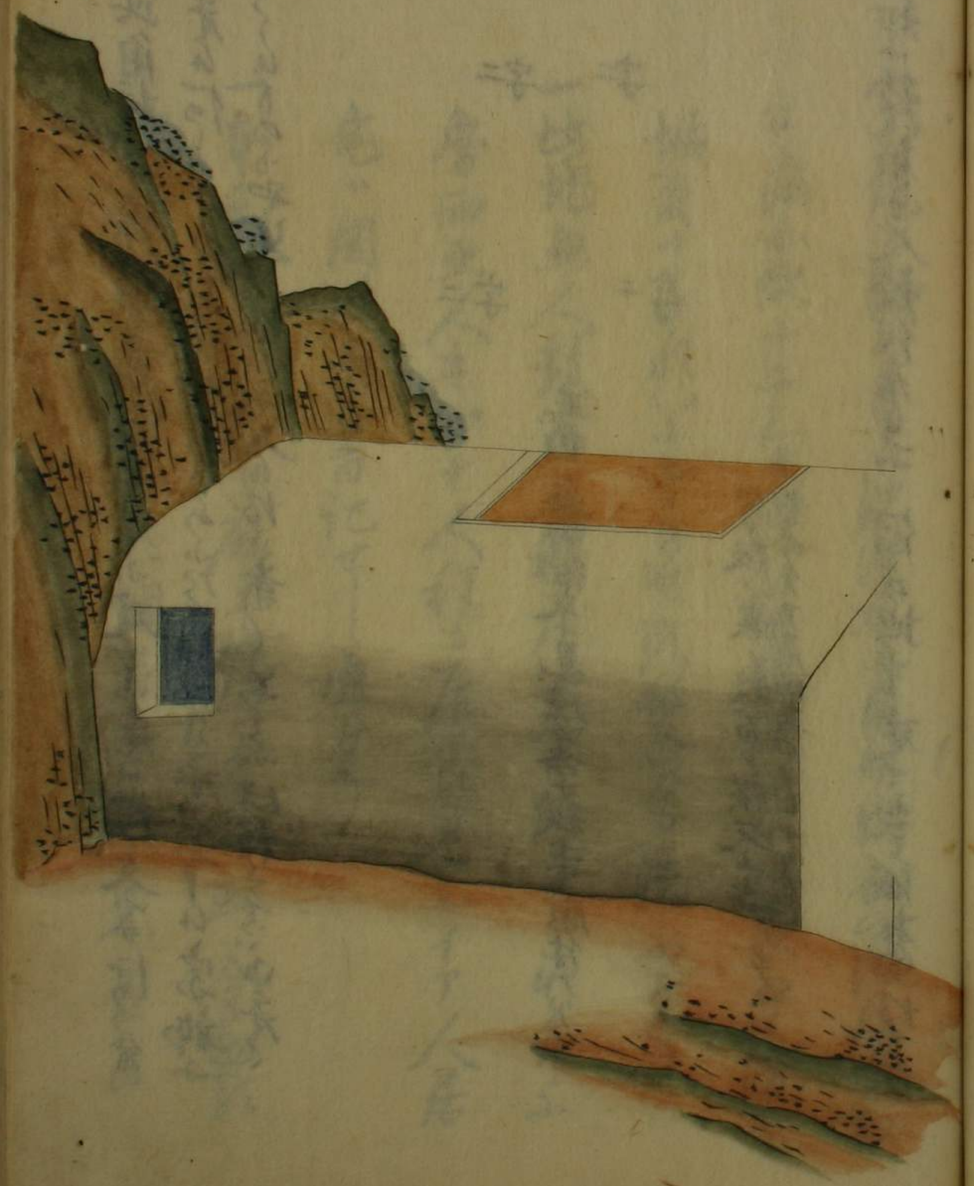
猟を使ふ手法の図

猟の柄を
交る小板を
一孔を穿つ
は孔より右手
の示指をさし
込て此小板
を五指にて
固く握り左
手鋒尖の
前を持ちて
投げるなり

頭を冠る
皮衣全図

ナアツカ魯西亜人居處図

造り高同しく土室あれど
入口ハ横一ヶ所にて板戸を立ツ
博風ばいふへき石ハ硝子障子
を仕そなへて天井西中ふハ「セイ
ウチ」の革をそなへ亜くはそ
事ふあることとて旦雨雪を避く
一土室ゟ四十人程住居る内ハ
七屋造りれぬくし通用ハ先
井をすると面との側ハ丈〳〵ふ
仕切あるなり



此角柱ニて作りたるの品の中ふ建テたる横文字ほり付
たるあふたて立たる彫ふ中ふ家紋ふ
かくたるものもや此ふ地ふふ入たるい者ふあふ付きて立たる

二字　二字

二字　二字

面此所経文ト見横文字数十字彫付アリ

コノ板ノ裏ニ数百ノ横文字
ホリツケアリ経文ノヨシナリ

頃郷ふ数ふ中ふ人数住居たるい何ふの地ふも建てたる板おもはれ

一小便と海め雪洗濯水ふ用ゆ皮衣の汚れたる物
ふ海小便ふ二三日浸け置て洗ふ皮衣ふて清く
垢着てきれいふなる迄既ふ洗ふなり
一戸数百人数百人程住居ふ河ふ舟ふ
魯西亜人ふ四十人程居ル才ロシイア人居
宅ふ囲れ上ふ書記せし通なり
一家ふ新ふて麻ふて作る物或ふ今物数
鍋釜針木綿糸新帽等載て来ル

一北斗ノ星 北極星也 隕上より少し北方へ向ひ
中し

一此時の云伝日 アカタ 月 トケタ 水 タガ
はこれ見ゆ アミシヤーツカも同
翌乙卯の夜れ来ふしてを「イワノイチガラロフ」
十四人 毎日魚釣り致ふ居りそ各分多も
互ひ多くしく居る 或年つくりて中より数交代致
連度ニ帰ル 出立日ハ仕拵れ十五人に

華の長板與アリ 長サ 文長サ 仕何 広 紀
糸組四月二日と見はは出帆仕
一此時漂流せしは寅の六月ヨリ蕃卯の
四月迄十一ヶ月ヨリ
一所納は皮類を艘ふ積文は移本集ふ不て
数海帰は此度の海帰一年ヨリ出ル
れ漂流人連度ハ帰ル出立とて
一日本の寛政三年辛亥年より此紀生蕃の

はせ〳〵と四年めとなる

一ガラロフ 年六十ふたくあるはずの者 馬(ウマ)

ゲライカ」といふ者の妻も連れて居る

留中子さん人 生まれる妻の年十七歳なる

大イワノイチガラロフ 樺太を地うち

連れ居る姉妹 宜くはたらくして大和加みより

高所(アイヌトカシラ)のやうな者ふ中なれ上より樺太方

も移りしとき 出られい五年商人中乃より

別合生まれる者は樺太へ移り

樺太は度ペトルブルカの都出立の節も

ガラロフ 使ふ中の者を多く食と共活仕居る

同月廿七日 サシパシヨウ 長四間四方

長四方ふふい魯西亜人四拾人程乗せ出帆

して所の海置らつたあぎしの皮等を積文

ふ 帆と出ちゃ出帆ふ 出来ない 樺太へ上陸不仕

帆ふ乗せ

一 蝦夷ナカツカより北の方ふあり カロシイア里

数四百里程あるといへ
一は船路海上コージキ多くて多くせ中し
一四月三日と覚へナカノ方出帳海十日大分寒
き海水の氷堆(ウツミカ)くなりて山の如くなりけり
扨先ハ海面ハ山のなきハ不数と見ハ方金
山多くて中に春ハ見ハ海水氷ハ多くて又
中ハ氷雪解して中山のなく無数
船ハ出れ見ハ其の外遠く海ハ此海

北亜墨利加の方角なり　サンパミヨウ」と三百
里北の方ハ高き岸なり岡なれども此の氷
海ハ氷山もなくなれハ入りこと難し
怪(ケミカル)事なりとて舵(カヂ)を廻しあそて急(イツ)きて
不より二日程を京庭して　サンパミヨウ」に
着て生帳より四数せ三四日を経り
サンパミヨウ」用事ハ仕舞出船して
五月十一日十二日ハ　アミセイ沼」と申海に見仕

以後ハ湊ヲ出サレ サンパシヨウ」より狭キ所を過ぎ（以後
より）陸奥駿河接近ス 此者共上陸ス
一以後この日小船ニて多し海上華船の往
来多し
一此度（先年紀州之者共漂流仕候ハ進
帰ル
一十アツカ」より此所を亜海魯西亜里数ハ
て九百里と申候 以後十アツカ」より

サンパシヨウ」ハ四ツ以後（三角形ハ多キ所
是ヨリこの里数何程ハ帰ル不仕
一アシセイツカ」より カミシヤーツカ」ヨリ地ヲこの
湊ハ海上千四百里と申ス
カミシヤーツカ者陸地東北の端ハ大川ヲ
以所二日程逗留用事ハ酒出帰ル
六月廿八日 オホーツカ」ヨリ大湊ニ居船ヲ
一以和魯西亜領地ヲ出帰ル 地伝ヲ南の

端のよし和領の地方へ入りはの湊なり

一アミセイツカよりはけ湊への里数凡百

但四拾餘の經度にて見侍

一十アツカ」より オホーツカ」に至る海上彼

里数三千五百里と凡百サンハミヤウ」

アミセイツカ」南西より北へ立寄りはけ湊へ寄る

のよし凡そ四千里もあるべきなり

扨南北極出地六十度前後の地より

海水氷り七十度緯南北極下ふちゝ

きれい岸ふ氷りて解けて無地図ふ

はれを氷海の部とす極寒の候ふ

いとまし氷りの上ふ雪積り又氷と

又つもり積みて平畳にして山をなす

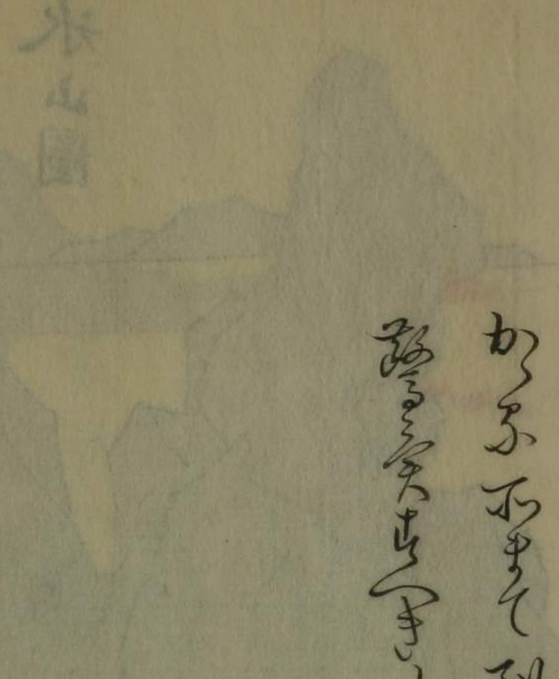
はまし氷山より卧児根德亜。エイスランド

夜国也 等の地を氷海ふして澎く極下

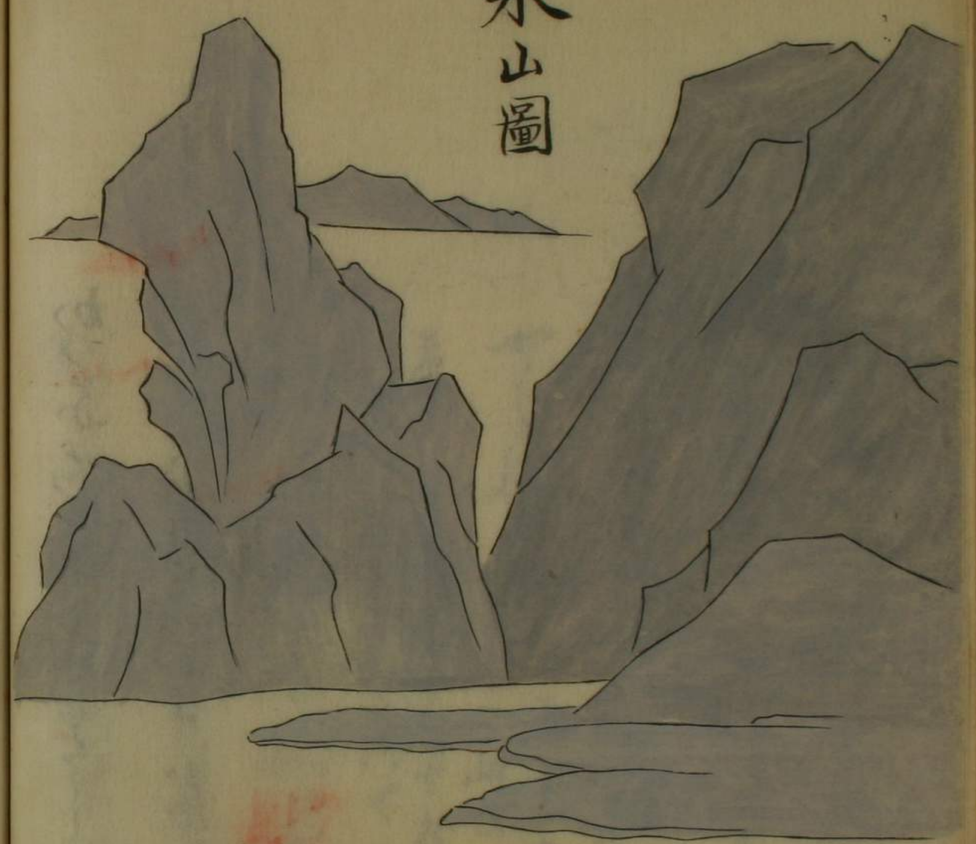
ふ近く氷山現出して暖和の候を見れば特新

出波あるとい

和蘭船の人を海に鯨捕ふ船を形容と図状せるものあり此度漂
人等めのうれしがれ状されとあり又南アメリカ洲雪山と澤せる
やうれしを不の岬の海上を呂宋しきも
角ふして毒極下七十度の海を和蘭船人
して和民ちふ驚惜せしるの本像ふ作せり
依て今新タふ和蘭寫生せる図ふ
より真像して生写を裝しさふ
作せり我漂民等不思議ふして



かふ不思して到るしい古今れ奇事
驚愕せしまき事なり


氷山圖

屋和都鈴（オホーツカ）

寛政七年乙卯六月廿八日オホーツカ（と）ヤ湊へ
長崎より本船の船頭より拙者共へ書遣
候ハ、去月廿日ハ松前の沖へ
投入仰の宅ハ表百口六万俵奥州八
九万俵ハ内ハ松前へ廻ハ
同船松前人ハ一ハ
松と餅のめく松前へ送ませ申ハ麦餅の

ふ
詳也

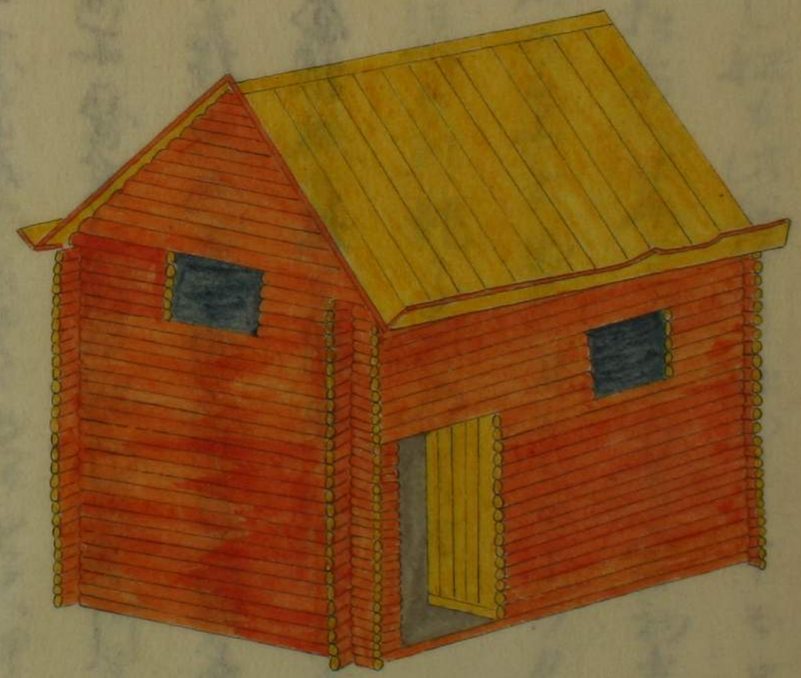
一ハ西ハ魯西亜領地ヤクツクの入口ハ湊ヤ是
より東ハ都（ミヤコ）府（フ）とも地続きハ北ハ南
向て大河の海へ注（ナガレ）川湊なり此地より
北の方ハ大河流を東ハ蝦夷港
のよし聞ハ
一船ハ内ハ弁ハ奉行ハ
一十アツカより内湊ハ大元彼星松

三千八百七十里程船を出せしアミセイツカ」
より未申 西南の間 又申酉と走り中山カミ
シヤーツカ」と唐湊の岬をい右ふ見て過ぎ
蝦夷岸付
一蝦夷岸の長サ五百石積位の船五六艘繋り
居り
一此湊北海中の不頼ふ借金をまき北
アメリカの諸国も此所に船を仕出す

一日本蝦夷諸藩の内コレイツケと唐へ近
年麦の粉と牛豚の類を此湊より海を
渡りてきい居り此コレイツケをカミシヤーツカ」と唐
此湊の擂虎(ラッコ)て上京して他国の擂虎
より價一倍位高く売る 按東夷奥蝦夷
ウルップ島の内ムラシウルップ
松前にて擂虎湊といふ
又按ふ行路人吏等を先年護送して

其ゝし船は湊より仕出し木モロへ流し
追ゝ松前へ其ゝしときけり宮初光寺
潮見の金山と出てカミシヤーツカとゝ
湊へ送られ地ろくへ入りを
一石大矢数挺是ハ寺ハ湊の左右ニあり
一方ハ七八挺一方ハ海場の上ふこ四挺又
寺の前ハ弐十挺餘是ハ置く何とも車
仕無れ蓋ハの世ハ長く七尺巾口徑
弐尺四方寸四方
一寺ハ長ケ不ル寸寺ハ寺のゆふ事
一屋造りハ横ハ九太木を主ね組あけ
家ケ屋根ハハ板を用ゆ

オホーツカ
家屋図



一はるかに居ぢいの家ハ暖かあるを方ばかり
冷ぢいの日本の二月ばかの氣候と共に屋の
内ハ綿入袷ふ着物を着ぢ八月ふ入る
雪後ぢ中ハ十二月の時ハ海も氷も厚く
氷ぢ川ふ多編一面ふ氷ぢ大の時ハ「カミシヤ
ツカ」と中陸へ千里餘の海上厚氷ぢ結ぶ
雪車ふ枯魚を積ぢ犬ふひかせ往来
一はるかに馬ハ居ぢ犬とまぢつかひ

犬ふ荷を積こる雪車を
為乗図

カミシヤーツカふても
図形は鞭を用申

一村地ハ雪多く積ル土地故雪車（ソリ）を用ひ薪水の類何にても積て運ぶ事

なり海岸にて船の走り使人（ツカヒテ）竭（ツカヒテ）の犬ハひらせ尾

大のつゝひ方能くかしこまる物なり

杖のぬきものをいれて吉凶を吹き

て ホロウ 犬（ヒト）ふるゝ方へ行き ライワ

犬（ヒト）ふるゝ方へ行き ピテマ 先（ヒト）ふるゝ方へ行

出ずゆくなり 海岸（ヒシ）にふるゝものをシトパイ

といふ 鍋杖を地ふるゝ方へ行せ 足を止むる

若の軽き事きふ 絶ひ犬ふ多ありて云

ふ事なれ 狗児の時より戸外へ出す 高い

ふて 家の内ハ 犬はなきとき ますなり

高い生魚 多い干魚を 食とも これハ 地ふ

出ても 犬ハ 左手 物 ふ

カミシヤーツカも 同 なり

地ふ 止白里（ヒビリ）の北 盡境 沿海の地も 如此 大 ふ

の図説 松宗 郡 地の 図説 あり

一土地ニ馬なき故「ヤコーツカ」と申す所へ使ひ出しヤコーツカ」の方へ人の往来物を
駄送のあなり彼地より出ること人を雇せ
馬ニ又ハ物を駄送し其馬を留め置き
出立ニ成て日ハ使ひ用を使ひ申
一ヤコーツカ前浜の人ハ其名を「ヤコーラ」と申し
居て使ひもヤコーニも雇ひ居申
一帰路中食料ハ麦餅（ケレビ）と申す洋ふ
イルコーツカ」の所なり

并ニ牛肉又魚肉を煮ル物も添へ弁せ申し
一使ひ終て日ハ未ニ帳元無申し日ハ帰
ル申し帳ハ元帳の日帳ハ出ス
八月十八日出発ス居ル人ハ彼人ハ此地ニ出ス
使ひ終申し無人数一同ハ不出ス帰ル
園ハ帰ル帰年ハ長ス長ス三人ハ中ル十八日出ス
使ひ代ハ交代の席ハ代ハ無ス新キ彼人
使ひ人数壱十人中ニ出ス三人の者も馬ハ乗せ

先ッヤコーツカ」と申おに登りの御ふはなく

一弁十二人の者ッ訳ふ孫ッ中ッ無人数ッ追ふ

送り為登ッ指ふ御ふはなく代変先ッ三年中ッ

一是より先ッの弁馬上ッ通用不

許蔵歩行ッ立ッ中ッ出来ッ馬ッヤコーツ

付ッ中ッヤコーツ」も言ふ事ッ口訳ふ御ふ出来

仕ッ先ッ人数ッ指ッるの口ふ法ふ

論ふ法ッ事ッ中ッ何疑も大れめくふはなく

多旅ふくその口ふ

一馬ッ三弁百文ッ訳ふ言ふ法ッ中ッ

已ッふ雪ふ有ッ指ふ薬極ふ足つけて法ッ中ッ

弁ふ飼料ふッ中ッ指ふ不法

一紙玉の馬ッ訳ふ弁の時羅九ふ言ふ法ッ中ッ

馬ッ多ッ指ふッ中ッ指ふ丈ふ言ふ

中ッ中ッ弁ふ不中ッ但ふ父馬ふ殺ッ中ッ

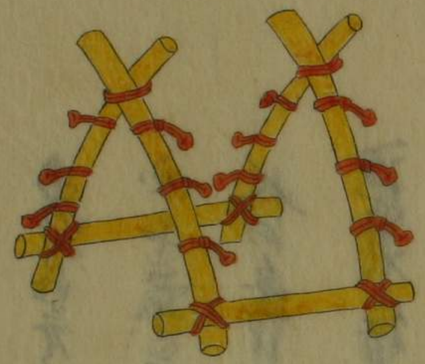
きんきりふ無ふ言ふ高ッ中ッ

一そこに荷物を負ふ食物等馬ふつけ乗りしは
下が七百里 彼里 牧 先キアウメン」とゆ所を人家篇
絶もなく山そこたりあて存申ず 野蕃住
一はこに成る五十程の三角のヤコーテ」ハ三四人で出来
一そこに裝束ハ皮の長物也毛の方を内ふし
ゑ浮縫つめ所を出しは穴をあけ裾の方より
長て上れ穴より所を出しは襟の下ふ所
を縫つけ垂 見えり生殺 長る所申ス 大穴より所を出し

襟の方より 垂ふ大所申を引ふり 袖を
左右れ肩袖へ通しは也 ゑ袋をあの長も
包ミ底の皮乃強を当てはは 代皮生殺 何
きも同様 図次ふ事
一馬の背ふ乗け人を乗せ鞍のあき物をセツ
ロー」とゆは又荷をつけ物ふ付垂しふ物を
ゼリワチカ」といふ下の図れを

旅行用意セし人の図

ゼリワチカ図



これと荷々の紐施せる物ふ川ゐて持こまゝ紐ハ丸て細くたちくゝり革なり

荷を固め結ひもとこゝろふしこゝろ図

一日ゝ中一体高山多く不ゝ山坂ばかりふる雲引
續き雪を踏い。不ゝ[illegible]ゝ[illegible]下夜と雪降来
多く降り来りて乃箱とそゝなくおんなる出来
ふヤコーテ馬ふ多くあるを乃業内仕ゝ荷物馬
人の乗いるを[illegible]行れも[illegible]なしそ[illegible]の多く
次第に佳き皆先キ[illegible]を[illegible]多く又不ゝ[illegible]
隈の不甚と多く降り[illegible]る馬足ふなくい
てい往来なくうるく

一当歇さして乙無ふゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝい杉と馬とこゝ[illegible]池あるゝゝ
一乃中山[illegible]の松多く[illegible]栄立の不
しりゝ不皆小栄ゝりゝて[illegible]先ゝ
ふい花の咲ゝ[illegible]櫻木多く[illegible]
乃中ゝ立て[illegible]ふて[illegible]

九月廿六日アウタニ
程四[illegible]ゝ 三十七八日かゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ ヤコーツカ

[illegible]
[illegible]の里数也　大川の側にて家数二軒あり此所
にてヤコーツカ」にて食物無し

一オホーツカ　出立の日　一里数五十五町ありて
[illegible]大の雪中道にて遠く遠く繋(オチ)て
漸十八丁程歩り旅行無事に達す
三百五十里だより[illegible]より此アウタン」を
[illegible]歩行る定にてヤコーテ」
三人を[illegible]迄十丁程歩り[illegible]人も

十人程り食物[illegible]出[illegible]
[illegible]の川向[illegible]
物[illegible]

一六抵九月　廿日ヒヤコーツカ」に居て仕[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

を拵たる三人分に椀一盃づゝ盛られ湯のみきらぬ程に拵へたる豆腐に水少しを無
はなれたる雪を鍋にとかし湯ふとうしに用ひ
ける時分鍋等も用意有事仕ること
ハ月ハ豆腐の汁に雪を入れ七月末
より豆腐ハ
一日に壱人の内に連れ樽に腐ら
ぬ様に氷を入れ日ごとに新敷
ヤコーツカ 鹿皮仕

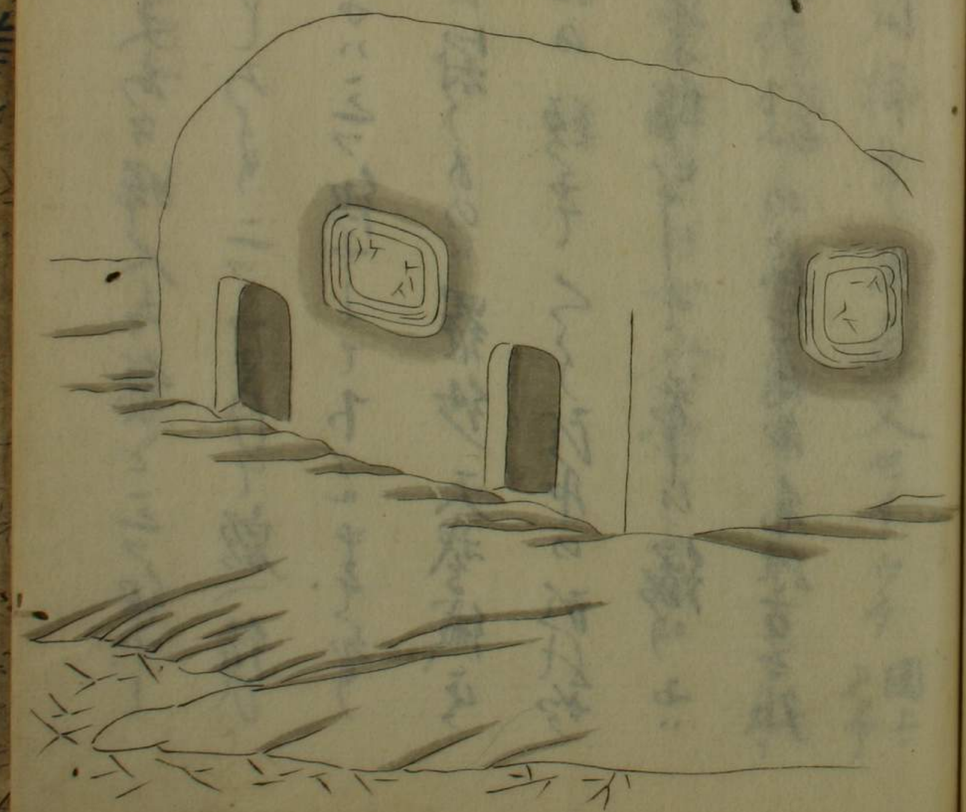
一日に壱人の内に連れ樽に腐ら
ぬ様に氷を入れ日ごとに新敷
一麦も出来る事牛野牛（コジョウ ヤギ）といふ 豚の形
なり者にて沒へ中ハ牛の乳汁を飲ハ
別けのもの方牛肉を食物とする者多い
イルコーツカ の不詳

食物等人魚出来詰送りて 日本出立仕て
ヤコーツカ を拵へ来る中ハ高山もなく
平地等人家所 五里六里 十里位ハ

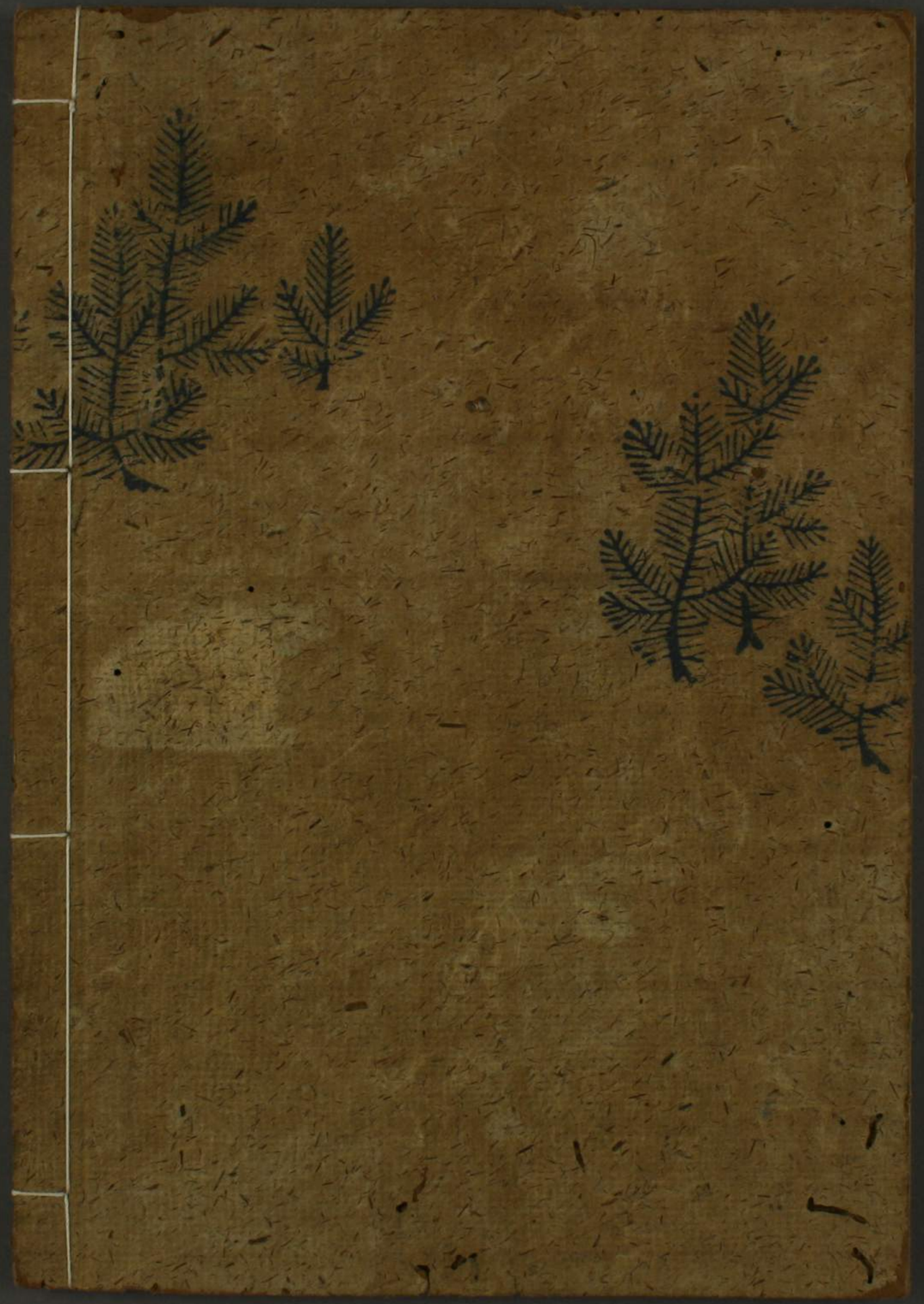
より人家等場所も此道筋の川と氷り
一面に厚くなり居る氷の上を通ります
一はこの平民家の造作に土蔵のごとく
屋根葺き四方共に土にて厚くぬり一方の
樣に入口をつけ中に内外二重
仕切外とかつて戸にて入り又樣に曲尺の
なる内の戸にはこれ内の戸を開きて居
夏は通ることなく仕切外の戸にはかりて
表の方より家屋煙の如く無に入り論ふ
堪えがたしの如くに仕切戸は二ケ所家
氣の内通ることなく居ることは内
入口に板敷にしてあり又土間もあるは
ちゃんとかいあるを敷き置き寢所
を高く敷き置き
一家のありさま家内中に生けり像
子のごとくふ氷を用ひ居ることを

屋根を川より家形ぶ切りぬき条てた家
の上へ住そめ是の遠方の高い雪をつめ
ていそ上へ水をうけ出て結氷ぶ忽ち氷り
付ける内に雪の外あうへ降りし外が
雪ときこ事又だ見も無ける節ニ成し成
拂ひ雪きこ事ぶ拂ふ事ぶ始ふ事もまた〳〵あうへく
あ事ぶ

アウタンより以西
人家土室図
窓ハ氷りの板を
仕入ル



一はだゝの女夫あり婦人ゝ髪をニッ組ふし
後へ下ケらしろより二ッふりけて額へ結ひ
ゑ[illegible]は振ふハニッ組ふして下ケたまてゆり
あて女子の冠りものハ羅紗天鵞絨毛
布毛織物の類ふて くゝり頭巾の形ち妙
ふし色と紫地ふして表ハ縁ふハ
猛虎ソーぎり[illegible]の皮を用ひ毛ち方を外ト
ふいゝしゝ

掃ゝ去蓋引掃ふて牛角又セイウチ 図上ニ見ル
の牙ふて作ゝ[illegible]ハ平りゝさしゝ[illegible]さゝぬ
根ふふ[illegible]はだゝの女入墨ゝふ法

環海異聞巻之二